

# 私の文房四宝

◇ 第一回

長野竹軒先生

(高・大・一般 草書担当)

今月から、月刊「書写書道」課題揮毫者が愛用する「筆・墨・硯・紙」を題材にした連載が始まります。いつから使用している用具なのか、どうやって手に入れたのか、使い心地など、各先生の用具への思い入れについて掲載します。今回は、高・大・一般の「草書」ご担当の長野竹軒先生に、愛用する「筆」をテーマにお書きいただきました。

## 私にとっての「筆」

「私の文房四宝」ということを考えた時、真っ先に思い浮かんだのはやはり「筆」でした。書とは、油絵のような時間をかけて重ね塗りをする「長時間芸術」とは異なり、線の太細、墨の潤滑を工夫した線(余白)の意思を発言する、「瞬間芸術」だと思っています。私の場合、半切なら長くても約5分間、先人の短歌や自分の言葉を書く漢字仮名交じりの書のような半紙なら、約30秒〜1分間程度で完成します。そのような意味でも、私にとって筆は、まるで手の延長であるかのような感覚で常に持っていたい、相棒のような存在です。

## 愛用の筆

皆様は半切や半紙に書く際のお気に入りの筆をお持ちだと思いますが、羊毛や兼毛、また和筆(日本製)や唐筆(中国製)と、筆の種類はさまざまです。今回は、私が特に愛用している

筆をご紹介します(次ページ)。

①は私が私立城北高校の学生時代に、書道部の先生に勧められた筆です。神田神保町にある玉川堂というお店で購入して、60年近く使用しています。この筆は、主に木製の板の上に楷書を書いたり、石碑の原稿を書く際に使用しています。随分毛が抜けてきていますが、使いやすい筆の一つです。

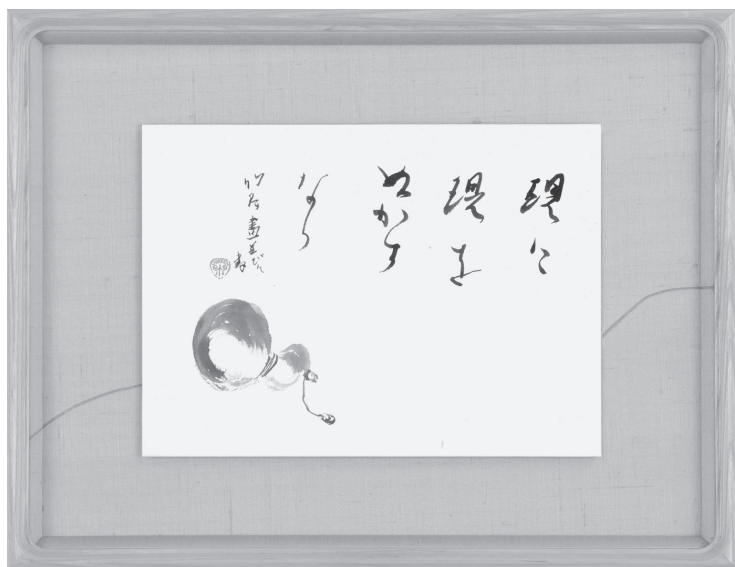
②と③は、検定教科書の教材や、自分の言葉を書く漢字仮名交じりの書を書く際に使用する和筆です。②は愛知県豊橋市にある筆屋が製作した「水明」という筆で、現在は浅草にある宝研堂で復刻され販売されています(作品Ⅰ)。③は浅草橋にある四宝堂で販売されていた「鳴鶴」という、芯立てがしっかりしている所謂江戸筆(残念ながらこれを製作できる職人がもうおりません)で、主に半切の手本や教材用として使用しています。

④と⑤は、私の個人的な作品を書く際に使用しています。④は細微羊毛の、⑤は日本製馬毛の「越塚筆」(作品Ⅱ)で、特に淡墨や濃墨の際はこの老舗の筆がとて頼りになり、学生時代

作品Ⅰ

「東京学芸大学退職記念展」出品作品

宝研堂はさまざまな豊橋筆を取り扱っています



■積文「現に現をぬかすなり」

から使用しています。

⑥と⑦は、展覧会用のお手本や、出品する際に使用する唐筆です(作品Ⅲ)。唐筆は筆圧をかかけた際に和筆のような反発がなく、非常に柔らかいので予期せぬ動きをすることから、あえて使用しています。それは、制御できない筆の動きから生まれるセレンディピティ(偶然の産物)を、今まで筆を扱ってきた経験則から、ある意



どの筆も、欠かすことのできない大切な相棒です

① 高校時代から使用している羊毛

② 半紙用筆 「水明」

③ 半切用筆 「鳴鶴」

④ 半切作品用 細微羊毛 「越塚筆」

⑤ 半切作品用 日本製馬毛 「越塚筆」

⑥ 公募展用 唐筆 「墨吐鳳」

⑦ 公募展用 唐筆

味コントロールして表現を迎えにくいという、とても高度なテクニックを駆使するためです。

筆を選ぶ弘法大師？

このように、私なりに表現する手法や場面に応じて、適切な筆を選んでいきます。プロの料理人がオムライスを作る際、雪平鍋ゆきひらなべを使用しないように、プロ野球選手がキャッチャーミットで

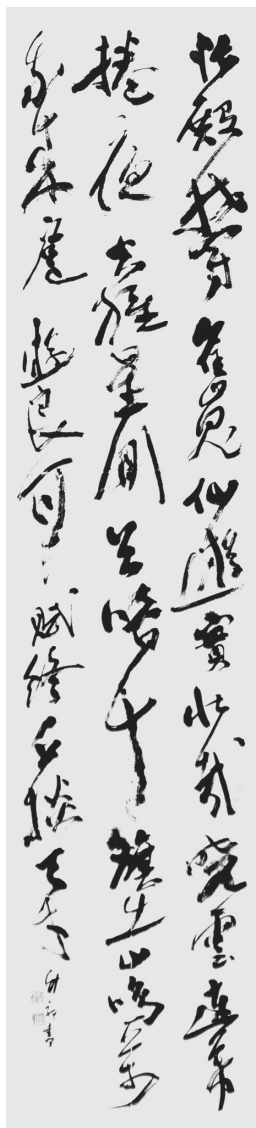
シヨートを守らないように、表現や状況にあわない道具はどの世界でも使用されません。「技能が優れていれば道具に左右されない」という意味のことわざ「弘法、筆を選ばず」があります。空海くわい（弘法大師）は書体別の製筆法を日本に伝来した人物でもあります。私も皆様も表現や場面にあわせて「弘法、筆を“しっかり”選ぶ」ということを常に念頭に入れて、書表現をしていきたいものです。

作品II 「第42回雅延会」 出品作品 独特なかすれも表現できます



■ 釈文 「満願成就」

作品III 「第60回創玄展」 出品作品 予測できない動きも表現の一部です



■ 釈文 「帳殿鬱崔嵬仙遊實壯哉曉雲連幕

捲夜火雜星回谷暗千旗出山鳴萬  
乘來扈遊良可賦終乏揆天才」